

『文化財と技術』

第8号

第一部 韓半島・日本列島の象嵌

- | | |
|---------|----------------------------|
| 崔基殷 | 製作技法分析からみた百済象嵌資料の系統とその解釈 |
| 鈴木勉 | 日本古代象嵌技術の起源と展開 |
| 林志暎 | 古代金属象嵌線の製作技法による分類の試み |
| 鈴木勉・金跳咏 | 日本列島／韓半島出土・伝承象嵌遺物一覧（稿）について |
| | 日本列島出土・伝承象嵌遺物一覧（稿） |
| | 韓半島出土・伝承象嵌遺物一覧（三国時代）（稿） |

第二部 古代東アジアの技術

- | | |
|------------|---|
| 崔基殷 | 武寧王陵出土装飾刀の製作技術と製作地 |
| 黒木英憲 | 金属工学からの提言 七支刀の製法について |
| 河野一隆 | 九州国立博物館蔵の冠・冠帽前立について |
| 于春・董亜巍・董子俊 | 唐代長安地区の小型金銅仏像および範鑄法による鑄造実験
——四脚座を中心として—— |
| 鈴木勉・金跳咏 | 東アジア金銅製獅嚙文帯金具の「埋け込み法」
公州水村里遺跡、長野県八丁鎧塚2号墳出土品について |
| 鈴木勉 | 朝鮮半島三国時代の彫金技術
その20 全北高敞郡雅山面鳳德里古墳群1号墳出土飾履ふたたび
その21 毛彫りか？蹴り彫りか？ |

第三部 復元研究報告

- | | |
|----|----------------------|
| 丁眞 | 慶州皇吾洞34号3槨出土耳飾りの復元実験 |
|----|----------------------|

『文化財と技術』第8号 目次

第一部 韓半島・日本列島の象嵌

製作技法分析からみた百済象嵌資料の系統とその解釈	崔 基 殷	5
日本古代象嵌技術の起源と展開	鈴木 勉	18
古代金属象嵌線の製作技法による分類の試み	林 志 暎	54
日本列島／韓半島出土・伝承象嵌遺物一覧（稿）について 日本列島出土・伝承象嵌遺物一覧（稿） 韓半島出土・伝承象嵌遺物一覧（三国時代）（稿）	鈴木勉・金跳咏	66

第二部 古代東アジアの技術

武寧王陵出土装飾刀の製作技術と製作地	崔 基 殷	83
金属工学からの提言 七支刀の製法について	黒 木 英 憲	110
九州国立博物館蔵の冠・冠帽前立について	河 野 一 隆	113
唐代長安地区の小型金銅仏像および範鑄法による鑄造実験 ——四脚座を中心として——	于春・董亜巍・董子俊	121
東アジア金銅製獅嚙文帯金具の「埋け込み法」 公州水村里遺蹟、長野県八丁鎧塚2号墳出土品について	鈴木勉・金跳咏	137
朝鮮半島三国時代の彫金技術 その20 全北高敞郡雅山面鳳德里古墳群1号墳出土飾履ふたたび その21 毛彫りか？蹴り彫りか？	鈴木 勉	149

第三部 復元研究報告

慶州皇吾洞34号3槨出土耳飾りの復元実験	丁 眞	161
----------------------	-----	-----

第二部 古代東アジアの技術

武寧王陵出土装飾刀の製作技術と製作地	崔 基 殷	83
金属工学からの提言 七支刀の製法について	黒 木 英 憲	110
九州国立博物館蔵の冠・冠帽前立について	河 野 一 隆	113
唐代長安地区の小型金銅仏像および範鑄法による鑄造実験 —四脚座を中心として	于春・董亜巍・董子俊	121
東アジア金銅製獅嚙文帯金具の「埋け込み法」 公州水村里遺蹟、長野県八丁鎧塚2号墳出土品について	鈴木勉・金跳咏	137
朝鮮半島三国時代の彫金技術 その20～21	鈴 木 勉	149
その20 全北高敞郡雅山面鳳德里古墳群1号墳出土飾履ふたたび		149
その21 毛彫りか？蹴り彫りか？		155

全北高敞郡雅山面鳳德里古墳群1号墳出土飾履ふたたび

鈴木 勉

『文化財と技術』第7号に鳳德里1号墳出土飾履の製作技術について書きました¹。鳳德里古墳群1号墳出土飾履は、実は鑄造製の可能性が僅かにあったのです。僅かにというのは、そのときは「数%の確率で鑄造製の可能性が残っている」と考えていました。そこで私たちは、全州博物館にお願いして実見調査をお願いしました。それが実現したのは、2016年5月16日のことでした。

鳳德里古墳群1号墳出土飾履は、全州博物館の展示ケースの中に納められていました。そこから取り出すことは許可されなかったのですが、写真撮影は許可されました。図1がその一部です。向かい鳳凰文の首が交差するところは見事に立体表現されています。また、鳳凰の頭部と首部と脚部は丸みを帯びていて立体表現されています。鳳凰の羽根も単純な線彫りではありません。膨らみが

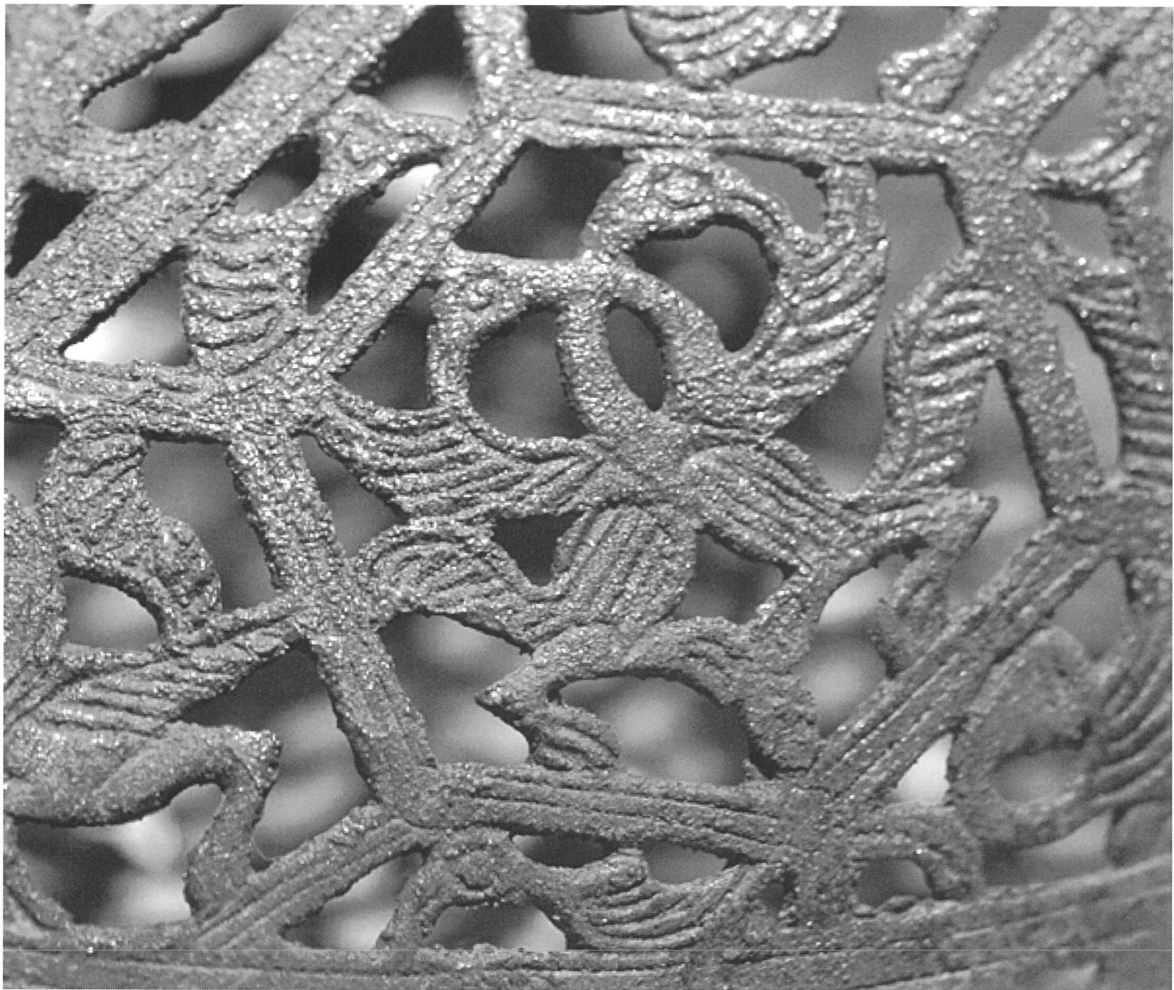


図1 鳳德里古墳群1号墳出土飾履（部分1）

1 鈴木勉 2015「朝鮮半島三国時代の彫金技術 その19 全北高敞郡雅山面鳳德里古墳群1号墳出土飾履の製作技術の疑問」『文化財と技術』第7号

あって立体表現されています。

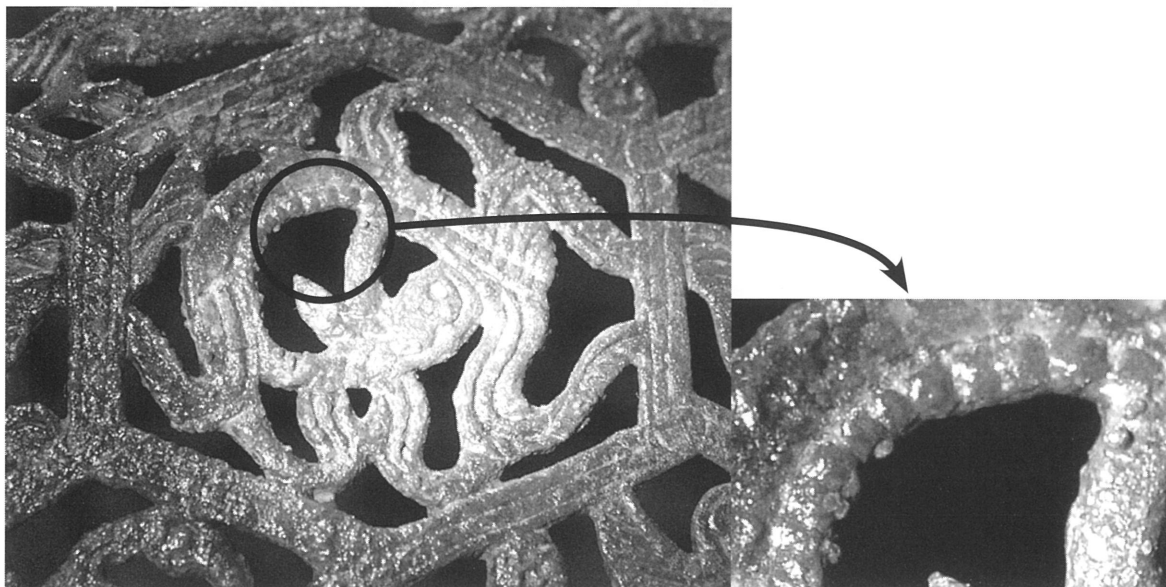


図2 鳳徳里古墳群1号墳出土飾履（部分2）

図2の龍の胴体の連珠文を見ると、たがねで刻んだ形状をしていないことに気がきます。連珠一つ一つが丸みを帯びているのです。これは「陰」の状態で施文しています。つまり、鋳型に対して彫っているのです。図3も全く同様です。

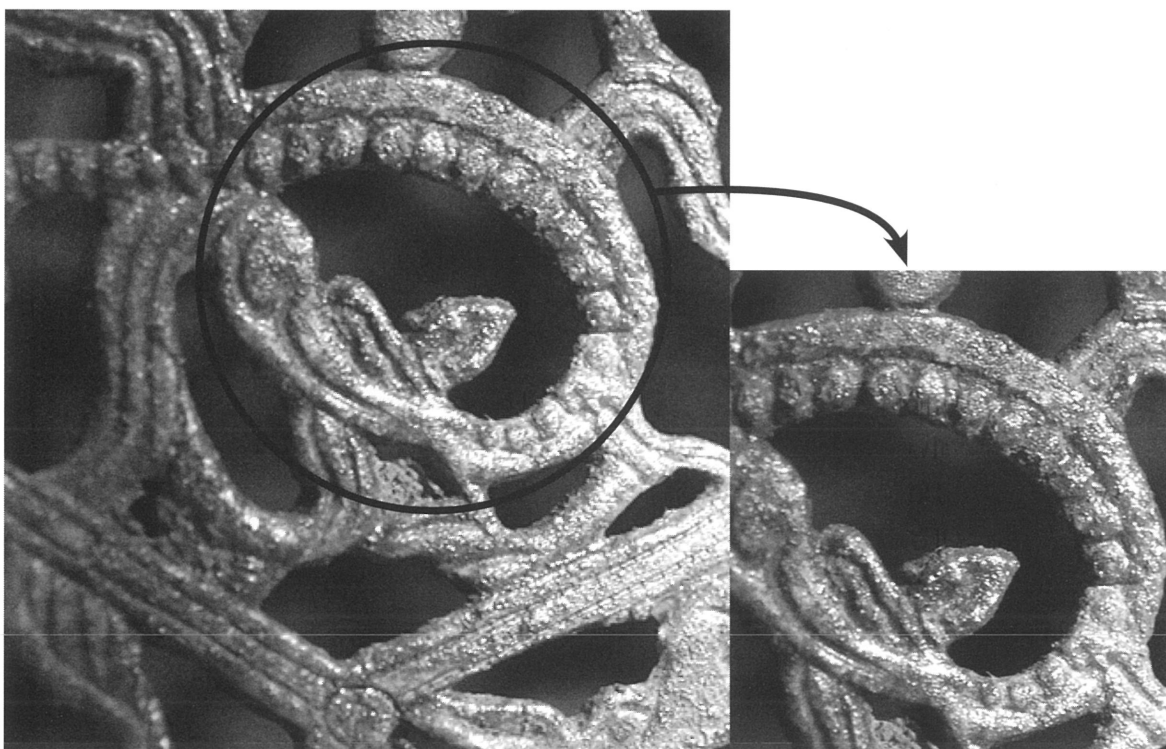


図3 鳳徳里古墳群1号墳出土飾履（部分3）

こうした文様は、たがねで彫ることができません。多くの飾履は蹴り彫りたがねで線彫りするだけですが、鳳徳里古墳群1号墳出土飾履は様々な部分を立体表現しています。

調査前までは、鑄造の可能性は数%くらいと考えていたのですが、調査した後は、99.9%鑄造製だと言えます。

他の写真も見てみましょう。各部位が全て膨らみを以て表現されていることが分かります。この飾履の原型はろう相当の材料で作られたと想定できますが、厚さが一定の板状のろうを用意し、それに立体感を付けていくのです。全体的に厚さが一定であるのは、板状のろうが素材として選ばれているからでしょう。あるいは、ろう製の原型を作るのに、開放型を用意し、そこへ溶けたろうを流すと裏面は平らな板状に、表面は薄肉彫りの文様が出来上がります。そのろう製の原型に対して表から暖めたへうなどで仕上げ加工してろう製原型を完成させ、土（鑄型の材料）でくみみます。乾燥・焼成して鑄込む、という手順でしょう。

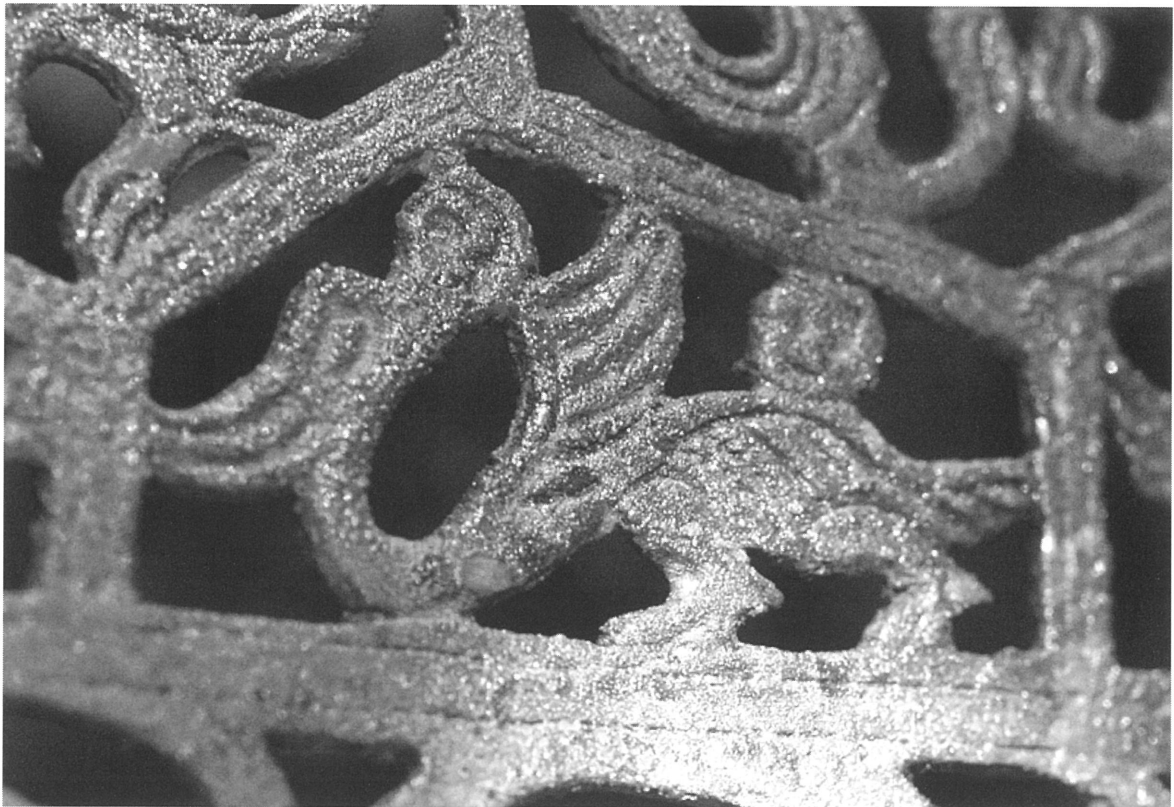


図4 鳳徳里古墳群1号墳出土飾履（部分4）

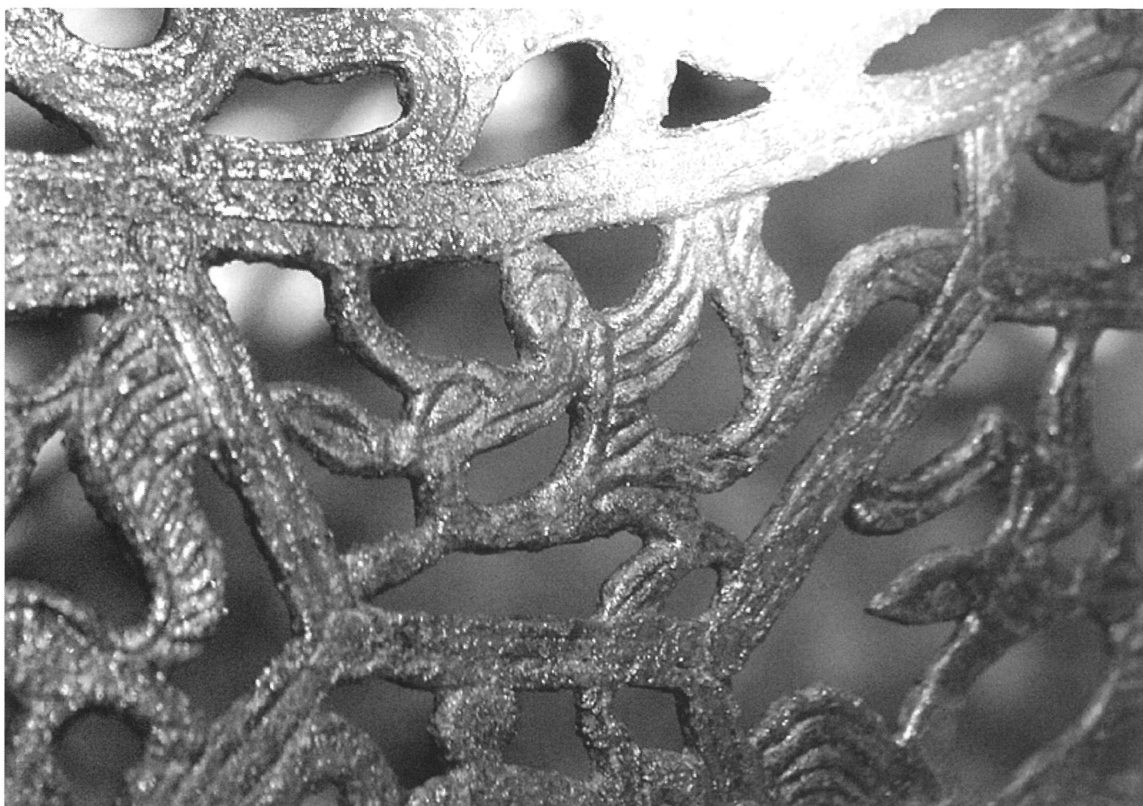


图5 鳳德里古墳群1号墳出土飾履（部分5）

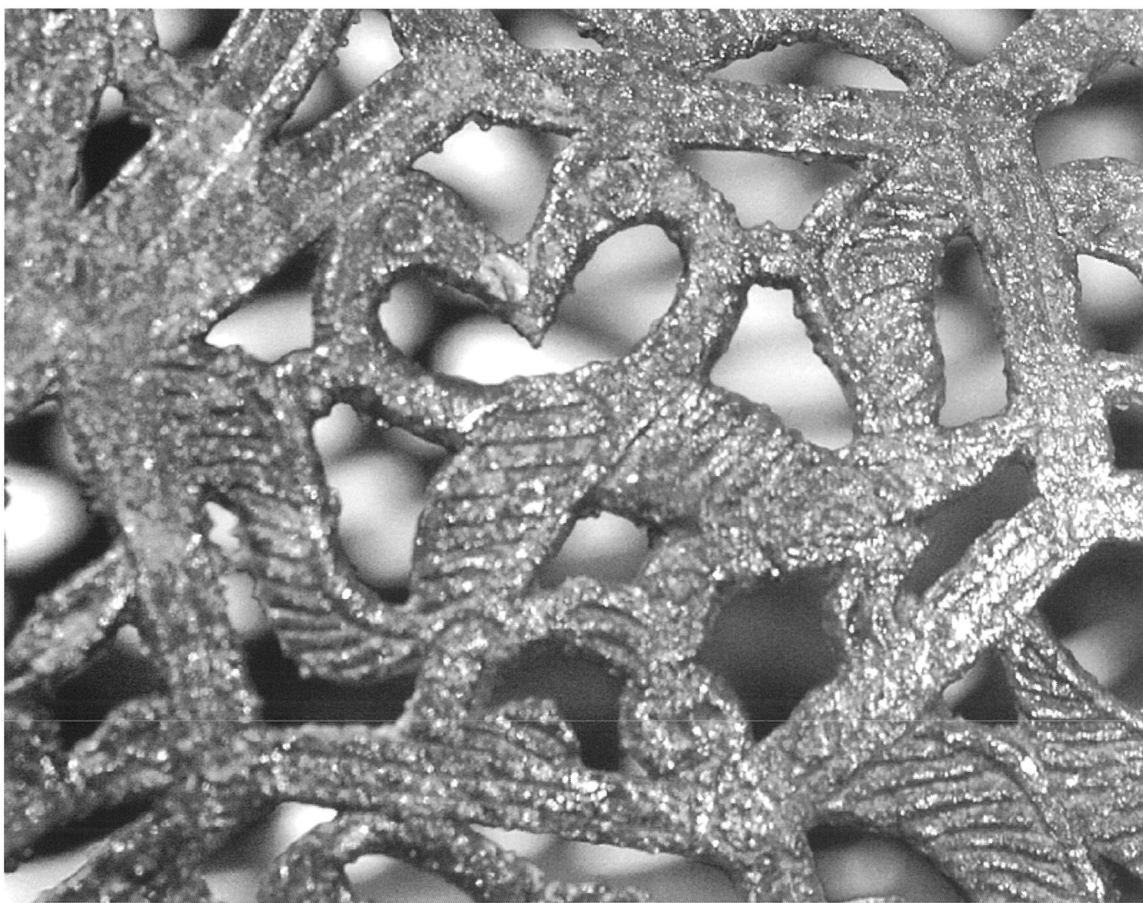


图6 鳳德里古墳群1号墳出土飾履（部分6）

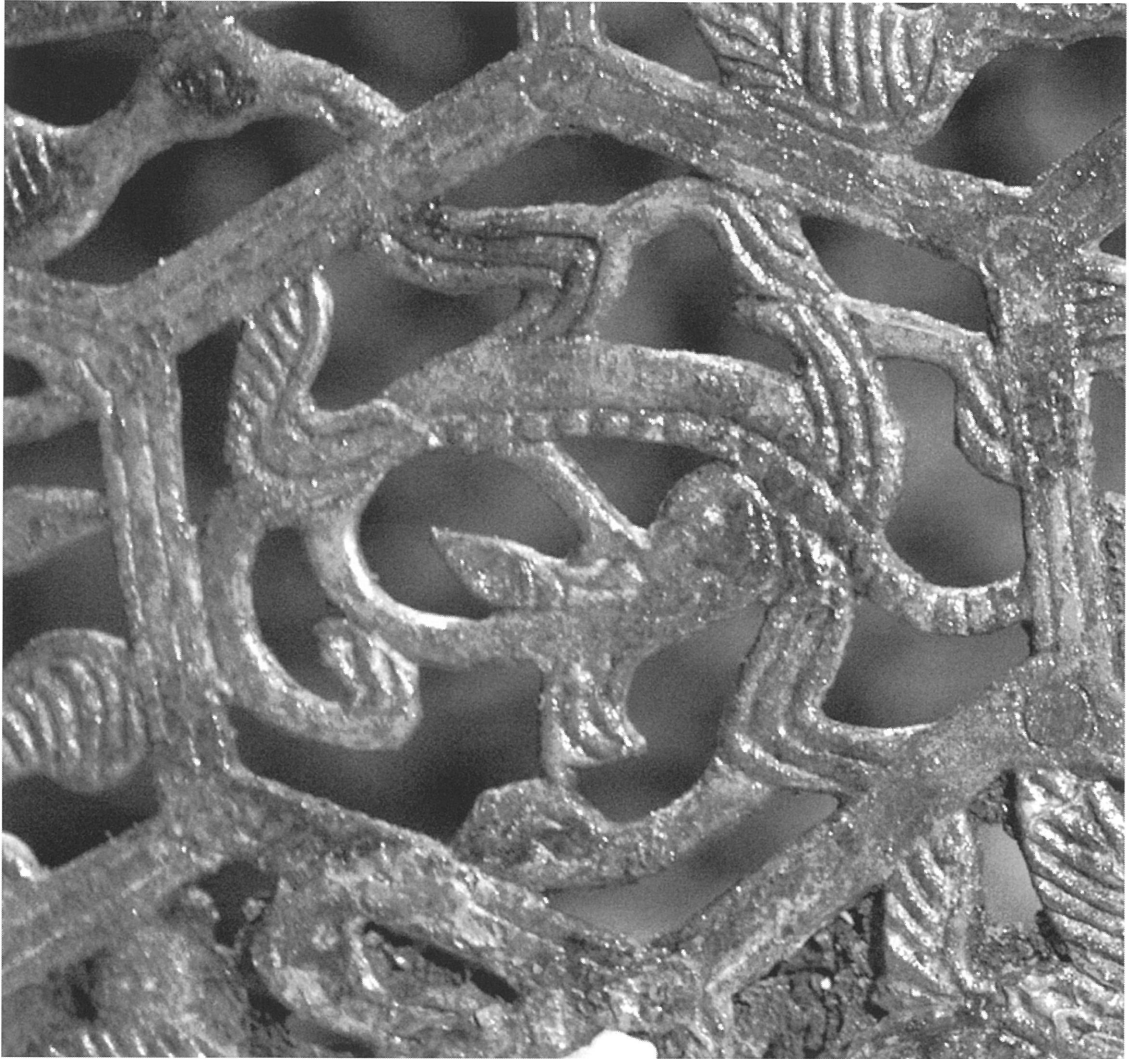


図7 鳳徳里古墳群1号墳出土飾履（部分7）

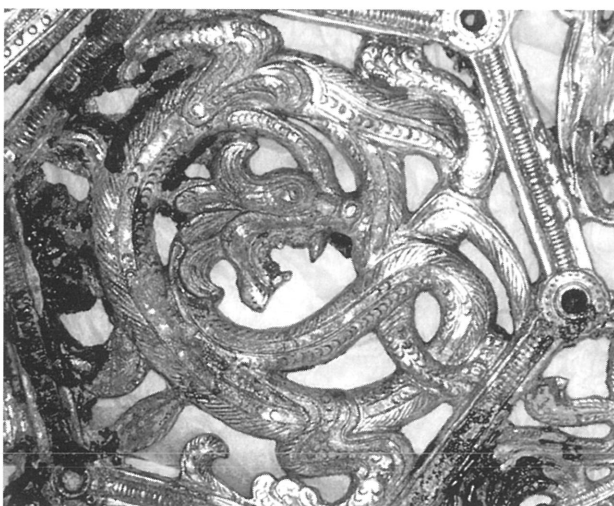


図8 斑鳩藤ノ木古墳出土金銅製鞍金具（部分1）

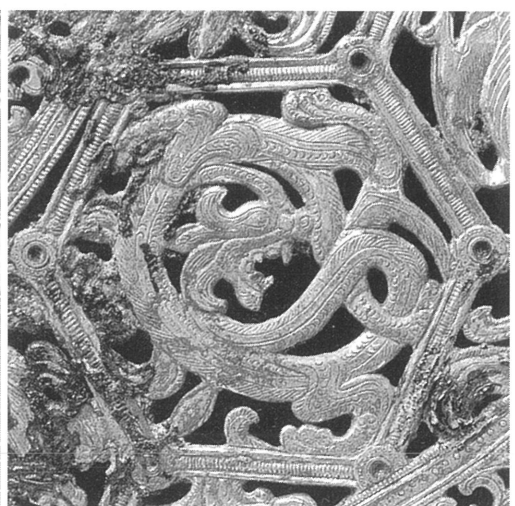


図9 斑鳩藤ノ木古墳出土金銅製鞍金具（部分2）

鳳徳里古墳群1号墳出土飾履の龍文と鳳凰文は、藤ノ木古墳出土金銅製馬具のそれとよく似ています。筆者は藤ノ木古墳出土金銅製馬具の鞍金具について、当初は鍛造製で「彫りくずし」で立体

彫刻されたものと考えていました。馬具の中でも杏葉や龍文飾り金具は鍛造製で間違いありません。ところが海金具の修理されていない部分は鑄造製であることを提案しました²。鳳德里古墳群1号墳出土飾履が鑄造製であれば、藤ノ木古墳出土金銅製馬具との関連が一層強くなります。今後の研究の進展が望まれます。

なお、鳳德里古墳群1号墳出土飾履の素材の厚さは、目測ではありますが1mm強と判断しました。通常金銅製飾履は0.4mmから0.6mm程度の厚さです。韓半島製の金銅製冠は薄いところで0.15mm、厚いところで0.5mm程度です。銅板の厚さが、0.5mm前後の値のものと1mmを超える値のものでは、加工技術の点からは全く異なる技術であることが予想されます。厚さが2倍になれば、加工に必要な力は、その3乗倍、つまり8倍となります。厚さが3倍であれば、加工に必要な力はその3乗倍、つまり27倍になります。そうすると、加工の難度は著しく上がってしまいます。従って鍛造製の飾履など金銅製品を作る場合、1mmを超える銅板を使うことは通常は想定できません。

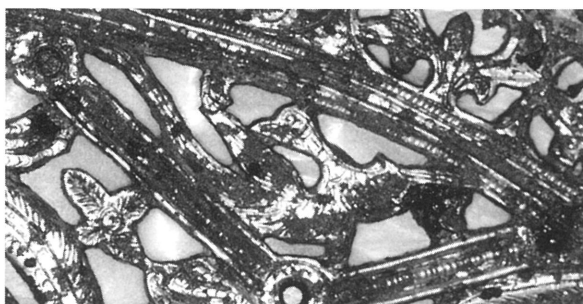


図10 斑鳩藤ノ木古墳出土金銅製鞍金具（部分3）



図11 斑鳩藤ノ木古墳出土金銅製鞍金具（部分4）

2 鈴木勉 2014「金工技術から見る南北朝・百済・倭の交渉—百済金銅大香炉・藤ノ木古墳出土馬具をめぐる技術移転—」『文化財と技術』第6号

文化財と技術 第8号

2017 年 7月28日 印刷

2017 年 7月28日 発行

編 集	鈴木 勉
発 行	特定非営利活動法人 工芸文化研究所 所長 鈴木 勉
発行所	特定非営利活動法人 工芸文化研究所 所長 鈴木 勉 東京都台東区根岸 5 - 9 - 19 (〒110-0003)
印 刷	千葉刑務所 千葉県千葉市若葉区貝塚町192 (〒264-8585)